

# 佛道の師を語る

「聞法は、単純な同じことでも聞けば聞くほどありがたい、どこまで聞いても尽きない」



永尾雄二 郎  
(医師)

聞き手・金光寿郎

(元NHKチーフディレクター)

## 人間のこころ

■金光 永尾先生は大正の末のお生まれだそうですが、佛法とのご縁はどういうところからできたのでしょうか。

■永尾 私は大正十四年の生まれですから、昭和とともに歳をとってきたようなもので、旧制中学の三年くらい（のときに、太平洋戦争（大東亜戦争）がおこったのです。ですから軍国色一色の時代でした。たしか中学の四年生、いまでいう問題の十七歳ぐらいのときに倫理の先生が、「韓の韓非子<sup>かんびし</sup>は人格者なるが故に喜怒哀楽を顔にあらわさなかった」と生徒に訓示をしました。私はそれがどうも腑におちなかつたので、手をあげて質問をしたのです。韓というのは紀元前二世紀頃、中国での戦国時代の一つの国で、その国の韓非子という人は秦の始皇帝にたいへん珍重された偉い思想家だったということです。その話がどうも腑におちない。「韓非子は人格者なるが故に喜怒哀楽を顔にあらわさなかったということ、喜怒哀楽を感じなかつた人ですか」と、先生にうさがつていったのです。「親が死んでも悲しくない、親しい人が死んでも、ああ死んだかと平然としている、あ

るいは友人が賞をもらつても、喜びもしない、そういう人はなにか感性が乏しいか、感情の希薄な人であつて、それを以つて人格者だと思ふことはできないのですが」と言つたのです。また、「もし感じていてもそれを顔にあらわさないということであつたら、偽善者ではないでしょうか、なぜそれが人格者なのか」と。倫理の先生はだんだん答えに窮してきて、「お前のような理屈っぽい奴は赤だ、反抗者だ」と言う。当時は「赤」というと犯罪者のように言われていた時代でした。

そこで、教師が教えてくれないことを私自身なんとか知りたいと、人格者とは何か、それは結局、人間とは何かということになるわけですが、それを知りたいために、ドストエフスキーやツルゲーネフなどを読んでみるうちに、やはり日本の作家の夏目漱石のものがびつたりしてきましたのです。『こころ』とか『三四郎』などにひかれました。里見美禰子という人が、田舎から出てきた三四郎に對して心のどこかでは好いてはいるのですが、頭では田舎者の三四郎を軽蔑している。といったようなアンビヴァレンス、同一の対象に對して相反する感情を同時に抱く、そういう感情がそこに出てくる、それを文芸評論家の森田

草平さんなどは夏目漱石のアンコンシヤス・ヒポクリットの思想だと解説しておられました。そのアンコンシヤス・ヒポクリット、無意識の偽善者ということに心をひかれ、夏目漱石にその時分、傾倒したのです。人間には表面の意識とはちがうかくれた心があるということです。

それからあと医学の道に進むようになり、そこで精神科の方に関心をもつようになったのです。そこでたまたま出会つたのが精神分析学の古沢平作こさき先生でした。古沢平作先生はウイーンのプロイドのもとで直接学んだ直弟子で、その先生が東京で診療にたずさわつていらつしやることを聞いてお訪ねしたのです。終戦間もない昭和二十一年春でした。無意識の心理学はまた精神分析学であつたのですが、それを学びたくて先生を訪ねたというよりも、むしろ私自身の悩み、人間とは何か、人格者とは何か、人はなんで生きているのか、そういう積年の悩みをなんとかして解決したいということで先生のところへお伺いしたというのが実情でした。

いのちにくれて

そこで、私自身も精神分析を受けていたのですが、一

年くらいたったある朝、昭和二十二年三月一日でした。

雪解けの道を歩いておりましたら、口からふつとひとり  
でことばが出てきたのです。「今朝はまあなんと空気  
のうまさかな」と、「春まだ浅き雪雲の空」と。これは歌  
でもなんでもないのですが、あ、歌だ。

今朝はまあ 何と空気のうちまきかな

春まだ浅き 雪雲の空

と、これがふつと出てきまして、それからあと、なに  
か人生観がすっかり変わってしまったのです。

いままで天皇陛下のため、東亜の平和のため、何々の  
ため、あるいは私自身なんのために生きているのか、と  
いうようなことで悩みつづけていたけれども、何のため  
に空気はうまいかと言ってみたところで、うまいからう  
まい。人はなんのために生まれてきたのかと問うても、  
こういうことのために生まれてくるといつて生まれてき  
た者はいないし、なんのために死ぬのかといつても、死  
ぬ時期がくれば死ぬ。こんなごくあたりまえのことを今  
まで「ために、ために」と考えてきたが、ためのない世  
界にわれわれは生きているのではなくて、生かされてい  
たのだと気がついたのです。私たちの背後にある目にみ

えない大きなのちにふれて、生かされていることを感  
じたのですが、不思議なことにそれから後はあれこれと  
考えあぐねていたベルグソンや、カントやプラトンと  
いったものがわかるようになった。たとえば西田哲学で  
言っている「主客合一」によるところの純粹經驗とか、  
「絶対矛盾の自己同一」といったような、むずかしいこ  
とばで理解できないでいたことが、こういうことではな  
いのかな、というようにすーつとわかってきたのです。  
哲学だけでなく、般若心経や白隠禪師・道元禪師など、  
禪的な書物にもふれていたのですが、そういうものが理  
屈なしに身に沁みてるような感動に打たれました。

さきほどの精神分析の古沢先生に、私はこんなふう  
にうれしく、踊躍歓喜の心を感じておりますともうしまし  
たら、先生は、「それこそは精神分析でも到達しがたい  
宗教的体験の世界だ」とおっしゃった。そして先生が  
おっしゃるのに、「ばくも求道学舎で近角常観先生など  
の話を聞きに行った。精神分析というものをほんとうに  
知るためにはやはりそういう宗教的なものをもつていな  
ければ、精神分析はできない」と先生はおっしゃったの  
です。直観的な先生の思想をなかには古沢先生はあまり

にも直観的で科学的でない、と批判をする人もあったのですが、先生がのちに（昭三〇）日本精神分析学会を創立した偉大な先生であるし、近角常観先生などに真宗の教えを学んでいたということもあって、『アジャセ・コンプレックス』という論説をフロイト先生に提出されたのは古沢先生でした。それまでの『エデプス・コンプレックス』に対して、日本人としての『アジャセ・コンプレックス』というものをおたてになられたのです。

ところがその先生がそれから七、八年たつて脳卒中で倒れ、意識不明になられた。それを聞いて私は早速お見舞いに行きました。その時分は私は静岡で開業していました。主治医は面会謝絶にしていたのですが、「静岡からわざわざ来ました、ぜひお会いしたい」と伝え、先生も「会いたい」ということでお会い致しますと、先生は、待っていたよとばかりに私に歌をくださった。それは先生の臨死体験というものでしょうか、意識がもどき目がさめたときにふっと心に浮かんできた、その歌が、生きてゐる 息の御徳の 思え人

息こそエスの しるしなりけり

息をしている自分に気がついた、あつ生きてゐるんだ

なあ、と。そしてその息こそエス——Es エスというのは精神分析の用語で、英語ではit イットとっています。が、「息こそエスのしるしなりけり」、「生きてゐる息の御徳のおもえ人息こそエスのしるしなりけり」と、先生はそんな重態でおられ乍ら、かつての私の歌「今朝はまあなんと空気のうまさかな春まだ浅き雪雲の空」を覚えていらつしやつて、「あの歌と同じ心境でしょう」と。とにかく息をしているということ自体、それがエスの働き。エスというのは無意識相で、佛教でいう阿頼耶識と重ねて考えるならば、それによつて、大自然のいのちと感応しうる宗教的体験の世界が開かれると申せましょうか。

■金光 精神分析でいういちばん根源的なものを「エス」ということばであらわしているというふうに了解していいわけですね。

■永尾 そうです。そして、わたしはそのころは『佛教概論』・『佛教の諸問題』・『意識歎異抄』など専ら金子先生のご本に接するようになり、金子先生のお教え一辺倒になつておりました。

人生の悲しみ

■金光 なにかのきつかけで金子大築先生のものに近づかれたのですか、あるいはなんとなくいろいろな佛教書などをご覧になっていて、たまたま金子先生に出われたのですか。

■永尾 話はさきほどの終戦後間もない二十二、三歳の学生時代に戻りますが、『維摩経』の維摩さまに理想の人間像を描いておりました。「毘耶離のまちの中に長者あり。維摩詰と名づく。すでにかつて無量の諸佛を供養して深く善本を植え、無生忍をえて弁才無礙なり。神通に遊戯して諸々の總持に及び無所畏をえて魔の怨いを降し、深く法門に入り、智度に善くして方便に通達す。大願成就して衆生の心の所趣を明了にし、また能く諸根の利鈍を分別す。(中略)人を度せんと思ふが故に善方便を以て毘耶離に居ます」といったようなすばらしい大人物です。私はすっかり維摩に魅了せられ、人間は佛教によつてはじめて本当の人格者というものになりうるのだ、「われ、天下の維摩たらん」というような抱負を持つていた時期なんです。

その時分にふと本屋で手に入れた本が『弟子の智慧』という金子先生のご本でした。昭和二十四年のことでした。

た。その『弟子の智慧』がまたちょうど『維摩経』に対する先生の随想を書かれた本だったのでした。ですからその維摩さまのことを書いてある『弟子の智慧』に感動して座右の書として、永年の間繰り返し繰り返しこれを読みました。ところが、金子先生はこの本を一つの疑問というか問題を提起して結ばれていらつしやるのです。

それは何かともうしますと、「はたして維摩はこの阿難のかなしみを理解しえたであろうか。もしそうでなかったとしたら、私はこの維摩の世界とは縁の遠いものとなるであろう」と書いていらつしやる。普通、維摩経のことを書いたら、「これはすばらしい教えだからこれに徹しよう」とか、「維摩のようなすばらしい人格者になるように」というようなことで結ばれるのが一般の常でしょうが、金子先生は最後にその維摩の世界に対して疑問を投げて結ばれておられるのです。

「阿難の悲しみ」これには一つのエピソードがあるわけです。阿難は十大弟子のひとりで多聞第一といわれている方ですが、お釈迦さまの在世中は他の佛弟子のように悟りを開くことができずに、唯聞法一すじの人であったといわれています。それだけにまた師の病いに心をい

ためた阿難の悲しみもひとしお深かったものと思われる。す。そのお釈迦さまが病気になられ食事も喉を通らない、そんな師の病いを案じて阿難は牛乳を持ってうろろろしていた。そこに維摩が出てきて、「阿難、おまえなにをうろろろしているのか、お釈迦さまは応病だ、仮に病気の相を示して人を済度するため病んでいるにすぎない、そんなこともわからんのか、そんなことでは佛弟子とはいえないぞ」というようなことを言って叱ったということです。

それに対して金子先生が問題を提起されたのです。『もし維摩がその阿難のかなしい気持を理解していなかったとしたら、私はこの維摩とはひじょうに縁の遠いものとなるでしょう』と。一見維摩否定ともうかがえるそのお言葉が示す先生の深いお心の真意は、九年間本と向かい合って考えてみても、どうしてもわからなかったのです。そこで、なんと少しでも金子先生にいちどお会いして直接お聞きしたいと、先生にお手紙をさしあげたのです。

#### よき人の仰せ

■金光 最初にお話の出た韓非子のこと、人格者韓非子が喜怒哀楽をあらわさなかったことへの疑問と共通のと

ころがありますね。阿難のことがわからなかったのかどうかというのはやはりその辺の問題は永尾先生ご自身のことか奥のほうにある一連の問題にふれたということのようにもうかがいますが……。

■永尾 そう思います。そこに金子先生のおっしゃられる「かなしみ」という人生そのものの問題の深さがあると思います。金子先生にお手紙をさしあげたところ「どうぞ、どうぞ」ということでお伺いしたのです。そのとき金子先生は喜寿の七十七歳。私は三十三歳でした。先生がひじょうなご高齢にみえまして、ご生存中にお会いできてよかったです、それこそ感激にうたれました。

■金光 阿難のかなしみについての疑問はその時に出されましたか。

■永尾 すぐではありませんでした。それから金子先生は九十六歳まで、あしかけ二十年元気でおられたわけです。ですからその間においおいと疑問も解けてきたのですが、矢張り本当の信を得るためには、よき人の仰せ（師の教え）を聞くことがどうしても不可欠なものだ、ということがつくづくと思われたことでした。ところでその疑問が解けたところに一足飛びにいきまますけれど

も、解けたというのはどういうことかともうしますと、維摩経における維摩は人間学としては一点のすきもない完璧なものです、私は精神分析を学んでいるうちに維摩に人間としての理想像を描くことができました。しかし、人間とはかくあるべきものなりということによって、人ははたして救われるであろうか、ということです。人間とはこうあるべきものなり、という理論や方程式によって現実悲しむ人を救うことはできない、というそのところを先生は疑問のかたちで、問題提起の私たちでおっしゃられたのです。そこからはじまるのが浄土真宗の「老少善悪のひとをえらばれず」と、一切の人が救われる教えとしての浄土真宗、念佛の教えというものがあつたのだ、ということがおいおいにして気づかされてきたわけです。さきほど金光先生が「韓非子の喜怒哀楽の問題と阿難の悲しみの問題が心の奥のほうでつづいていきますね」とおっしゃいましたが、私自身、韓非子が喜怒哀楽を顔にあらわさなかつたということに對する十七歳の時の疑問が、六十年たつてすっかり解決されたかと言うと、まだまだ解決されてはおりません。いまでもまだその喜怒哀楽の問題は私の問いとして続いておりま

す。そこに私は真宗の教えの根本的な問題があるのではないかということをおもっています。浄土は彼岸にあればこそ、人生を照らす光となるものではないでしょうか。

#### 聞思のころ

■金光 二十数年金子大榮先生におつきになつてお話を聞いてこられたわけですが、最初にお会いになつてから、何年もお話を聞いていらつしやつた間に、聞き方がわかるものですか、あるいは味わい方がわかるものですか、あるいは、かわらないけれども聞けば聞くほど味がでるとか、その辺のところをお聞きしたいのですが。

■永尾 そのとおりだと思います。だんだんかわつていくというものではないですね、わたしの場合には。ただ、かわるといふのではなくて、深みといたしましうか、広がりといひましようか、聞けば聞くほど、同じことを何回聞いても、たとえそれが単純なことであつても、聞けば聞くほどありがたい。また、まだまだそのことについてお聞きしたい、ということ、あれはもうわかつたから聞かなくてもいいというものが、現代の、あるいはなにか知的思想かもしれませんが、そうではない。

聞けば聞くほどありがたい。どこまで聞いてもつきない、というような、そういうものであると思います。

■金光 知識の集積だとそれはもう聞いたから知っている、とそこでストップするのでしようが、単なる知識ではなくて、そのことばによって伝わる世界、先生が話される世界には、ああまだ奥があるとこちらに感応する、そういう導かれかたのような感じ方でございませうか。

■永尾 はい。それを金子先生は『聞思』ということばでおっしゃいました。真宗の教えは聞思の教えである、と。聞く、思う、聞思ですね。金子先生はそれを強調していらつしやるし、『聞思の教学』といえは金子先生の教えとして真宗教学において評価されておりますが、金子先生は「自分のつくつたのが聞思の教えだ」とおっしゃるのではなくて親鸞聖人のお教え、これはもう聞思の教えであると。「聞思のころ、姿勢でなければそれはわかりません」と、いうことをいつも言つていらつしやいました。その心を、

智慧あらば 弟子であれかし

究みなき 法のりを受くるにさわりなければ

と和歌であらわしておられます。智慧があるならば

子でありたい、と。究みなき法は無限の法ですね、それを受くるのにさわりがないから、と。これが聞思のころというものであろうと思います。そしてつねに弟子の姿勢ですね、わかりやすく言いますと、わしは人格者だ、善人だ、知識人だ、といったような指導者意識に陥ることなく、つねに弟子の姿勢。『歎異抄』でいえば「ひとへに往生極楽のみちを問ひ聞かんがためなり」問い聞くといいその姿勢。その問い聞くといいこと、それが聞思の姿勢というもので、そこに救われる教えとしての真宗の教えのありがたさがあるのではないでしようか。それが金子先生のお心といたしております。そんな氣持を私は歌にあらわしてみました。

師に遇いし 想いは遠く 慶びの

光となりて 今にかがやく

『遠慶宿縁おんきょうしゆくえん』といいますが、「たまたま行信ぎょうしんをえば遠く宿縁をよろこべ」という、あのおことばの心をいただいて日日の日暮しをさせていただいております。

■金光 ありがとうございます。

(この対談は、平成十三年四月二十二日、NHK

ラジオ「宗教の時間」で放送されたものです。)